

「於長王宅宴新羅客」詩の論

井 実 充 史

一、二つの詩群と二つの饗宴

「懷風藻」は、「於長王(宝)宅宴新羅客」と題された、長屋王の私邸で新羅使を饗宴したときに詠まれた詩十首を掲載する。次はその詩題及び作者名である。

秋日於長王宅宴新羅客 并序 (五二)^[1] 山田三方

秋日於長王宅宴新羅客 賦得風字 (六〇) 背奈行文

初秋於長王宅宴新羅客 (六一) 調古麻呂

秋日於長王宅宴新羅客 賦得稀字 (六三) 刀利宣令

秋日於長王宅宴新羅客 并序 賦得前字

(六五) 下毛野虫麻呂

於宝宅宴新羅客 賦得烟字 (六八) 長屋王

秋日於長王宅宴新羅客 賦得流字 (七一) 安倍広庭

秋日於長王宅宴新羅客 賦得時字

秋日於長王宅宴新羅客 賦得秋字 (七九) 吉田宜

詩群は探韻の有無で大別される。探韻は集団で行う作詩なので、有探韻詩群は同席の酒宴で詠まれたとしてよい。

一方、無探韻詩は、有探韻詩群と別の宴席で詠まれたと一応推測されるが、特に、山田三方詩は有探韻詩群とは別時の作品であろう。というのも、三方詩には詩序があり、有探韻詩群にも下毛野虫麻呂の詩序があるが、一つの詩宴に詩序は一つあれば十分であると思われるからである。一方、同じ無探韻の調古麻呂詩は、宴席の設けられ得る日程を考慮すれば、有探韻詩群か三方詩のどちらかと同時の作であったらしい。なぜなら、饗宴は二回しか催されなかったと推測されるからである。

秋に、長屋王の私邸で、新羅使のための饞宴が開かれる可能性は、〈小島注〉にあるように、養老三年閏七月（長屋王大納言時代）、養老七年八月（同右大臣時代）、神龜三年七月（同左大臣時代）の三回に限定される。ところで、同注は、新羅使を宴する大役を考えれば左大臣就任後がふさわしいと述べるが、養老七年は左大臣が欠員で右大臣が最高位であるし、養老三年は、右大臣として最高位にあった藤原不比等が既に六十一歳の高齢で、ナンバー2の大納言長屋王が代役を務めた可能性もある。左大臣就任前の長屋王も、新羅使を宴する大役を十分こなせる地位にあつたと言えよう。さらに、長屋王の詩苑で詠まれた詩の題には、「左僕射」の記述の有無に違いがあるが、「同一人の詩の場合でも、区別されて記されているのであるから」(百済和麻呂の詩題に「初春於左僕射長宅」)と「秋日於長宅宴新羅客」の書き分けがある——井実注)、「左僕射」のない詩題は左大臣就任以前の作品と考えてよいであろう。したがって、この饞宴は、左大臣就任以前、すなわち養老三年閏七月と養老七年八月に設けられ、そのどちらかか三方詩と有探韻詩群が別々に詠まれたことになる。そして、「初秋」の題を持つ古麻呂詩は閏七月に催された養老三年の饞宴で詠まれたとの推測が可能となってくる。

残念ながら、外部的検証から明らかにできるのはここま

である。そこで、今度は、作品内部の検証によって、古麻呂詩が有探韻詩群と無探韻の三方詩のどちらと共通性を持ち得るかが明らかにされるべきであろう。共通性のある詩が同じ宴席で作られたと推測できるからである。結論を先に言えば、二首の無探韻詩が、やはり同時の作であつたと考へる。その点を、作品の表現を通して検証しよう。

二、三方詩・古麻呂詩の検討 (養老三年閏七月時の饞宴)

まずは、三方が叙した五二番詩の詩序から見てゆこう。便宜上、段落に区切って説明してゆく。

君王以敬愛之冲衿、広闢琴樽之賞。使人承敦厚之榮命、欣戴鳳鸞之儀。

長屋王は敬愛の心で酒宴を開き、新羅使は榮譽ある御命令(御招待)を受けて、長屋王の立派なお姿を仰ぎ見ると言う。「敦厚之榮命」を新羅王よりの使命と取る説もあるが、この句は長屋王の新羅使に対する「敬愛之冲衿」を受けての句であるから、長屋王の招待を指しているとする説に従うべきである。

於是琳瑯满目、蘿薜充筵。玉姐雕華、列星光於煙幕、珍羞錯味、分綺色於霞帷。

参加者及び食卓食事の描写である。〈林注〉は、「星光・

煙幕・霞帷」など天象氣象に關する語句を用いることで、天上の宴席を見るようだと言美していると述べる。

羽爵騰飛、混_二賓主於浮蟻_一、清談振發、忘_二貴賤於窓雞_一。歌台落_レ塵、郢曲与_二巴音_一雜_レ響、笑林開_レ靨、珠輝共_二霞影_一相依。

酒宴の盛んな有り様を描いた部分である。「混・忘・雜・依」などの文字を使つて渾然一体の状況を強調しているところに、盛宴ぶりがよく表れている。

以上は、長屋王の敬愛の心によつて素晴らしい酒宴が開かれたと述べて、この酒宴の中心人物が長屋王に他ならぬことを強調し、序文の前置きとしたものである。続いてこの饗宴の具体的様相が叙述されていく。

于_レ時露凝_二旻序_一、風軫_二商郊_一。寒蟬唱而柳葉飄、霜厲度而蘆花落。小山丹桂、流_二彩別愁之篇_一、長坂紫蘭、散_二馥同心之翼_一。

まず初めに秋の到来と秋景を述べる。「礼記」月令は雁の渡来を仲秋のこと、また、霜が降りるのを季秋のこととするので、「霜厲」の渡来は秋もかなり深まったころの景物となる。しかし、「露」と「寒蟬」については、同じく「礼記」月令の「孟秋之月」に「涼風至、白露降、寒蟬鳴」とあるように、これらは初秋の景物である。「風軫_二商郊_一」も季節が夏から秋に変わったことを言っているように。したがって、

この景物描写は初秋を念頭に置いてのものと言えよう。続いて、心と同じくする者同士が離別の詩文を詠じあうさまを述べる。なお、〈大野注〉の指摘するように、「小山」は読書を好み賓客数千人を招いた淮南王劉安の門客を指し、「長坂紫蘭」は曹植が曹丕（後の魏文帝）の酒宴に侍して詠んだ「公讌詩」の「秋蘭被_二長坂_一」を典故とする。これは長屋王を淮南王や魏文帝に比して賛美したものである。

日云暮矣、月将_レ除焉。醉_レ我以_二三千之文_一、既舞_二踏於飽德之地_一、博_レ我以_二三百之什_一、且狂_二簡於叙志之場_一。

こゝは、送別の酒宴で詠まれた詩文の実態を述べた個所である。「五千之文」は老子道德経五千余言、「三百之什」は詩経三百余篇のことで、当日詠まれた詩文の素晴らしさを強調する。しかし、送別の場面であるにもかかわらず、離別の悲しみを詠み得ているかどうかには関心を示さない。それどころか、「飽德之地」と言つて、会場を長屋王の恩徳に飽く場所と述べ、叙述の中心を長屋王賛美に置いている。このことは、なにか送別の宴らしからぬ雰囲気を用意させてよう。

請写_二西園之遊_一、兼陳_二南浦之送_一。含_レ毫振_レ藻、式賛_二高風_一云爾。

最後は参加者に作詩を促す。「西園」は前述の曹植「公讌

詩」に「清夜遊^二西園」^一とある「西園」を指すとするのがよい。「長坂紫蘭」と典故を同じくする点からもそう考えられよう。つまり、長屋王主催の宴を魏文帝の宴に比して讃えているのである。

こうした文脈にしたがえば、最後の「高風」も長屋王に關わつての叙述と見るべきではなからうか。「高風」を林注や小島注は新羅使の風格を誉めた言葉と解釈している。しかし、序文全体に渡つて、使人を宴の主人公とする立場に立つての叙述は見られない。それであるのに、ここで突然使人が賛美されるのは、少し考え難いように思ふむしろ、この宴を主催した長屋王の風格を讃えて一文を閉じたと読むべきであらう。

このような解釈は、次に挙げた三方自身の詩からも導き出される。

白露懸^レ珠日、黄葉散^レ風朝、対揖^三三朝使、言尽^九秋
韶、牙水含^レ調激、虞葵落^レ扇飄、已謝^靈台下、徒欲^レ報^二
瓊瑤^一。

(五二)

第一、六句は、白露が降り黄葉の散る秋に新羅の使人を迎え、伯牙の如き琴の調べ（牙水）と梁上の塵をも落とす虞公の如き歌声（虞葵）は、まるで虞舜の音楽（韶）のようだと述べる。新羅使歓迎の宴での素晴らしい音楽を讃え、主催者の長屋王を賛美しているのである。続く第七・八句

について、前句の解釈が定まっていない。後句の「瓊瑤」は、江淹「雜體詩一謝法曹」、「末響寄^二瓊瑤^一」の李善注に「瓊瑤謂^二玉音^一也」とあるように、本来は音信を意味するが、ここは長屋王の言葉あるいは詩文のこと。したがって一句の意は、及ばずながら拙詩を差し上げて長屋王のお言葉（あるいは御詩）に報いようと思う、となる。そこで前句だが、まず「靈台」は周文王のうてなで、ここは長屋王の邸宅を指す。箭集虫麻呂が長屋王邸での酒宴で詠んだ詩「於左僕射長王宅宴」の初句「靈台披^二広宴^一」（八二）と同じ用法である。次いで「謝」についてだが、沢田総清「懷風藻注釈」、世良亮「懷風藻詳釈」、杉本行夫注釈「懷風藻」（それぞれ、沢田注、世良注、杉本注）と略記する）のように「去る」の意とすれば、長屋王宅を去つてから王の言葉に報いる詩を作ろうということになり、意味が通らない。やはり、小島注の述べるように、「謝」を感謝の意に取つて、長屋王宅で王の恩に感謝するとの解釈が妥当である。そしてこのことは、「高風」を長屋王賛美の語とする私見を補強してくれよう。総じて言えば、三方の詩序も詩も、叙述の中心は、長屋王を賛美し盛宴を讃える点に置かれていたのである。

次に、古麻呂詩について検討してみよう。

一面金蘭席、三秋風月時、琴樽叶^二幽賞^一、文華叙^二離

思一、人含二大王徳一、地若二小山基一、江海波潮静、披
霧豈難_レ期。 (六二)

冒頭四句は、親しい朋友たちが風雅の宴を開いて離別の思
いを詠ずると言う。続く二句は、長屋王が「大王徳」を備
え、その私邸は「小山基」のようだと言う。〈大野注〉の述
べるように、「大王」は、宋玉との風流問答で有名な楚襄
王、「小山」は、前述のように淮南王劉安の門客のこと。長
屋王の風雅性及び作宝楼の脱俗的たずまいを賛美して言
ったのだろう。最後の「披霧」は、同じく〈大野注〉の述
べるように、楽広と会うことは雲霧を払いのけて青天を見
るようであったという故事により、人と会うことを敬って
言う語である。要するに、使人に対して、やがては再会で
きるだろうと言っているだけで、離別を悲しむものではな
く、彼らへのたんなる挨拶と見てよい。むしろ、この詩の
大半は長屋王の風雅性を讃えているのであって、そこに作
者の意図があるう。

以上、三方と古麻呂の作品を見てきたが、古麻呂の初秋
の詩に対して、三方の詩序にも景物描写に初秋の匂いが漂
い、また、両作品とも長屋王を王侯クラス以上の風流人に
なぞらえて賛美する。つまり、主題が共通し、作詩の季節
も矛盾しないのである。後述するが、有探韻詩群の主題は
別のところにあるので、主題の共通する三方詩と古麻呂詩

を、同席、すなわち養老三年閏七月時の饗宴での作と認め
てよいだろう。

さて、三方詩と古麻呂詩が養老三年時の饗宴での詠であ
り、ともに長屋王の風雅性を讃えた作品であったことを明
らかにしたが、饗宴の主催者を賛美する詩が詠まれるとい
うことは、養老三年時の饗宴が、いわゆる送別の宴として
の性格を持っていなかったことを示しているのではなから
うか。送別を目的とした宴であったならば、新羅使との別
れを悲しみ、旅先の不安を慰めることが詩の主題となるは
ずである。主題とは言わないまでも、その点について少し
でも触れるのが使人に対する礼儀であろう。ところが、饗
宴の主人公となるはずの使人については、軽い挨拶程度で
しか触れず、主催者の長屋王やその邸宅の風雅性ばかり詠
んでいるのである。こうした状況から、この時の饗宴の性
格を規定するとすれば、新羅使への供応ということにかこ
つけて、実は、長屋王を中心として張った私的な宴、と言
うのがふさわしいのではないか。つまり、長屋王の私的な
宴会に外国使を参加させたという程度のものであったと推
測するのである。

皇子や王、上流貴族を中心とした私宴は、天武・持統朝
以降盛んに行われたらしく、河島皇子「山齋」、大津皇子「春
苑言宴」、葛野王「春日翫鶯梅」、中臣大島「山齋」、犬上王

「遊覽山水」などは、そのような私宴で詠まれたものと考
えられる。これらの詩に共通するのは、風雅性や脱俗的境
地を強調する点で、例えば、河島皇子「山齋」は、

塵外年光滿、林間物候明、風月澄遊席、松桂期交
情。
(三)

というように、世俗を離れた風雅な趣きを詠みあげ、大津
皇子「春苑言宴」では、当日の宴を、陶淵明の酒宴を意味
する「彭沢宴」に匹敵するものとしている。また、中臣大
島「山齋」では、その趣きが「攀桂期」、すなわち淮南王劉
安「招隱士」に描かれた「桂樹叢生兮山之幽、偃蹇連卷
兮枝相繚……攀援桂枝兮聊淹留」以上の境地であると誇
る。養老三年時の饗宴の性格は、このような、皇子・王・
上流貴族を中心に私的に催された文雅の宴に近かったと思
われる。

ところで、本詩および序が王勃集や駱賓王集から多大な
影響をうけていることは、小島氏によって既に明らかにさ
れている⁽⁶⁾。王勃集の伝来について、氏は、正倉院に残る王
勃集残巻の書写年時が慶雲四年（七〇七）七月二十六日で
あることから、第七次遣唐使の帰朝した慶雲元年（七〇四）
に伝来したと推測する。また、駱賓王集について、氏は特
に限定していないが、私は、唐中宗が散逸した文章を探し
求めたと集序にあること、その中宗朝が七〇五―一〇年の

王朝であることから、その伝来は、七一八年に帰朝した第
八次遣唐使によるものと推測する。となると、養老三年（七
一九）時の饗宴では、伝来したばかりの詩文集を利用して
いたことになる。王勃集の利用も、その伝来後十数年しか
たっていないのだから、まだまだ新鮮な感じを与えた
であろう。

三方はこれら新風の唐詩文を、当日の饗宴の風雅性を飾
るために利用したのである。小島氏の指摘によってその例
を示せば、「風鸞之儀」や、「小山」と「長坂」の対など、
長屋王の容貌や風雅性を賛美する詩句は、それぞれ「鸞鳳
虬龍之君子」（王勃「秋日遊蓮池序」）、「文條擢秀、馥長
坂之幽蘭、筆苑揚葩、煜小山之丹桂」（駱賓王「上兗州
張司馬啓」）により、また、「羽爵騰飛……忘貴賤於窓籬」
や「露凝旻序……鴈度而蘆花落」など酒宴の風雅な有り
様を述べたところは、それぞれ「居榮命於中朝……混以
蘿裳……賓主由其莫弁」（王勃「秋晚入洛於畢公宅別道
王宴序」）、「金風生而景物清、白露下而光陰晚、庭前柳葉、
纔聽蟬鳴、野外蘆花、行看漚上」（王勃「秋日宴季処士
宅序」）等を典拠とするなど、王勃・駱賓王集の詩句の利用
が集中しているようである。これは、養老三年時の宴の私
宴的性格を反映して、作者が、風雅の表現の充実のために
王駱集を利用したからであると考えられる。このことは同

時に、当時の王駱集に対する理解が、風雅に富んだ作品集という程度のものであったことを、図らずも露呈している。

三、養老七年八月時の饗宴

養老三年時の饗宴の性格及び王駱集の理解度を、作品の特徴を示しながら述べてきたが、今度は有探韻詩群について検討しよう。もちろん、それらが作られた場合は養老七年時の饗宴である。まずは六五番詩の詩序から見てゆく。

夫秋風已発、張歩兵所^二以思^レ帰、秋氣可^レ悲、宋大夫於^レ焉傷^レ志。然則歳光時物、好^レ事者賞而可^レ憐、勝地良遊、相遇者懷而忘^レ返。

まず、張翰が秋風に望郷の念を抱き、宋玉が秋気に悲傷した故事を踏まえる。これは、秋の別れの悲哀を響かせているとも言われるが、その点は暗示にとどめ、むしろ、秋が人の心を動かす季節であるという点に重点が置かれている。これを受けて、今まさに景物を賞美し風雅の遊びを行うべき季節であるということが述べられている。

況乎皇明撫^レ運、時属^二無為^一、文軌通而華夷翁^二欣戴^一之心^一、礼樂備而朝野得^二歡娛^一之致^一。

天皇の統治により、天下太平となり、文物の儀がすべて備って、藩客・朝野こぞって天皇を仰いで歡樂を極めると

言う。あたかも、天皇を、万国に君臨する中国皇帝の如くに見なした表現であり、中華思想がうかがえる部分である。

長王以^二五日休暇^一、披^二鳳閣^一而命^二芳筵^一、使人以^二千里羈遊^一、俯^二鴈池^一而沐^二恩盼^一。

ここからが本題。まずは、長屋王が酒宴を開き、使人の参加したことを述べる。

於^レ是雕俎煥而繁陳、羅薦紛而交映。芝蘭四座、去^二三尺^一而引^二君子之風^一、祖餞百壺、敷^二一寸^一而酌^二賢人之酌^一。琴書左右、言笑縱橫。物我兩忘、自拔^二宇宙之表^一、枯榮双遣、何必竹林之間。

右は酒宴の様子を描写した部分であるが、参加者について、「君子之風」を引き「賢人之酌」を酌み、竹林の七賢に劣らぬ超俗性を持っていると言う。彼らの高風を賛美するのである。

此日也、溽暑方^レ間、長阜向^レ晚。寒雲千嶺、涼風四域。白露下而南亭肅、蒼烟生以北林譙。草也木也、搖落之興緒難^レ窮、觴兮詠兮、登臨之送歸易^レ遠。

冷涼な秋の夕方のしんみりとした情景の描写。「草也木也」以下四句は、〈小島注〉の指摘する如く、「文選」、潘岳「秋興賦」にある左の部分を要約したものである。

悲哉秋之為^レ氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰、慄慄兮若在^二遠行^一、登^レ山臨^レ水、送^レ將^レ歸。

これは、草木の衰える秋の悲しさを、自らが他郷にあつて
帰郷者を送る悲しさに喩えたものだが、虫麻呂の詩序の場
合は、まもなく遠く離れて行く〔易遠〕使人たちに對し
て、共に酒を飲んで別れの悲しみを癒そうと言っているの
であろう。〔世良注〕や〔林注〕のような、秋の面白味を感
じて別離の悲しみも忘れてしまふとする説には従い難い。
なお、次に挙げるのは、同じ典故を踏まえて別れの悲しみ
を述べた駱賓王集の例である。

登_レ高切_ニ送_レ婦之情_一、臨_レ水感_ニ逝川之嘆_一、既而嗟_レ別
路之難_レ駐_レ、惜_ニ離樽之易_レ傾_一。

〔秋日餞陸道士陳文林得風字〕序

「秋興賦」を踏まえる点ばかりでなく、「……難、……易」
の対も共通しているので、送別の宴の詩序を作ろうとした
虫麻呂が、同じく送別の宴のために作られたこの詩序を参
考にした可能性は高い。

加以物色相召、烟霞有_ニ奔命之場_一、山水助_レ仁、風月無_ニ
息肩之地_一。請染_レ翰操_レ紙、即_レ事形_レ言、飛_ニ西傷之華
篇_一、繼_ニ北梁之芳韻_一。人探_ニ一字_一、成者先出。

最後に、人々が休む暇もなく賞美してまわるほどだと言
つて風物の素晴らしさを述べ、秋興の詩や送別の詩を作る
よう促して閉じる。

以上の解釈を踏まえたうえで、この詩序を、先述した三

方のそれと比較してみると、次のような特徴が浮かび上
ってくる。

①明君の統治による天下太平と礼樂完備、それに伴う万
国からの朝貢、と言った儒教的理念に基づく中華思想
を掲げる。

②風雅なる人物として贊美される対象が、参加者全体に
広がっており、一方で、宴の主催者である長屋王への
贊美は目立たなくなっている。

③離別の悲しみに触れている。
右に見てきたような詩序の特徴は、詩にも指摘し得る。

まず特徴①については、「職貢梯航使、從_レ此及_ニ三韓_一」(八
六)が、使人を朝貢してきた藩客と認識している。次の句
も同様であろう。

聖時逢_ニ七百_一、祚運啓_ニ二千_一、況乃梯_レ山客、垂毛亦
比_レ肩。
(六五)

一・二句は、今の御代が、周成王の占いの兆しと等しく三
十七七百年続き、天子の福運は千年に一度開けるほどのめ
でたさであると言う。「梯山」は山に梯子をかけるよう
に、はるばる海を渡ってやってくることに、「垂毛」は難解
で、髪を垂らすのは普通は子供だが、あるいは新羅人独特
の髪型を言っているのかもしれない。いずれにせよ新羅使
を指していよう。「比肩」は人の多いこと。

ところで、「梯_レ山」には、次のような用例がある。

指_二麾_一八荒定_一、懷_二柔万国夷_一、梯_レ山咸入款、駕_レ海亦
来思
(唐太宗「幸武功慶善宮」)

皇帝が万国を平定したので、異民族たちが遠くから入朝すると言っているのである。前掲四句は、この詩想に近いのではなからうか。つまり、今は聖代であるので、藩国の使者が多く入朝してくると述べて、万国に君臨する皇帝の如き天皇を賛美するのである。

次に、特徴②については、宴の参加者全体を賛美した詩句は見られない。が、長屋王への賛辞も、王の邸宅を鳳凰のいる楼台とみなす「鳳樓詞」(七七)ぐらいしかない。しかし、これも籥の名手蕭史と妻弄玉の故事によるもので、長屋王宅の素晴らしさよりは、音楽の美しさを言うことにむしろ主眼がある。したがって、詩序に見られる特徴は、詩のほうにも貫かれていると考えてよからう。

最後の特徴③は、詩には明確に出ている、送別の宴で詠まれた詩にふさわしく、帰郷する新羅使に友情を抱き、旅人の旅愁を慰め、別れの悲しみを訴える詩情が多く詠出されている。とりわけ、それらの離愁表現の多くが、王勃・駱賓王集によっている点に注目したい。例えば、「願慰_二転蓬憂_一(七一)は、「転蓬」のようにさすらう旅人の憂いを慰めたいということだが、駱賓王集には、「転蓬驚_二別緒_一、

徒橘槍_二離憂_一」(「晚泊江鎮」)、「蓬_レ転俱行役、瓜時独未_レ還」(「在軍中贈先還知己」)などがある。「青海千里外、白雲一相思」(七七)は、胡志昂氏の指摘する如く、「相思明月夜、迢遞白雲天」(王勃「有所思」)に倣っている⁽⁹⁾。「千里」も両集によく用いられており、「魂歸滄海上、望斷白雲前」(駱賓王「叙寄員半千」)のような、「滄海」と「白雲」の対を用いて生別離の悲しみを述べる表現もある。

以上は、離愁表現を部分的に拾い上げたものであったが、一首全体が離別の悲哀に彩られている詩を三首挙げよう。

玉燭調_二秋序_一、金風扇_二月幃_一、新知未_二幾日_一、送別何
依依、山際愁雲斷、人前樂緒稀、相顧鳴鹿爵、相送使
人歸。
(六三)

末二句の詠懐部分は、「鳴鹿」が群臣嘉賓を宴に迎える歌を意味するので、「吾々一同は心をこめて嘉賓を接待する酒宴の幹旋をして新羅の使者の帰るのを送る」(杉本注)と口語訳できる。使人との別れを悲しみ、その帰郷を心をこめて見送った詩と言えよう。その他、「依依」は離れるに忍びない心情を表し、「愁雲」は別れの愁いがもたらす心象風景を表した言葉で、どちらも別離の情をよく表現し得ている。特に後者は、小島氏の指摘するように、「緒_二愁雲於南北_一」(王勃「越州永興李明府宅送蕭_二還齊州序_一」)に倣っている⁽¹⁰⁾。

西使言帰日、南登餞送秋、人随蜀星遠、驂帶断雲
浮^一、一去殊^二郷国、万里絶^三風牛、未^レ尽^四新知趣、
還作飛乖愁。
(七九)

これも一首全体が離別の悲哀に満ちている。まず冒頭二句で餞宴を張ったことを述べ、第三句から六句にかけては、使人の故国がいかに遠くにあるかを強調し、最後に、飛ぶように離れてしまふことを愁えるのである。なお、「南登」、「驂」が王勃集の送別詩に見え、「蜀星」が駱賓王集の送別詩による造語であること、「小島注」の説く通りである。「断雲」についても、「断雲飄易^レ滞、連霧積難^レ披」(駱賓王「秋夜送閣五還潤州」)のような送別詩の例がある。

職貢梯航使、從^レ此及^三三韓、岐路分^レ袷易、琴樽促^レ膝難、山中猿吟断、葉裏蟬音寒、贈別無^二言語、愁情幾万端。
(八六)

冒頭二句は新羅使を朝貢使と見なして、対等の立場に立ってはいないが、その他の句には、旅人への思いやりと離別の悲しみが感じられる。三・四句の「分^レ袷」は袂を分かちて別れること。「促^レ膝」は、互いに膝を突き合わせて窮屈に座ることから、親密な間柄。別れはたやすいが親密に交わることは難しいと言って、旅人への執着心を示しているのである。この二句、田村謙治氏が「岐路分^レ襟易、風雲促^レ膝難」(駱賓王「秋日送侯四得彈字」)によると指摘した

通りである⁽¹⁾。また、愁人・遷客の悲哀をいや増すものとしての猿声のイメージは、六朝後期にはほぼ完成していたと言われるが、五句の「猿吟」も、別れの悲しみをますます強める景である。また、「……断……寒」の対句について、「小島注」は「自憐疎響断、荒林夕吹寒」(駱賓王「秋蟬」)によると言う。別れの悲しさに言葉も出ず、愁いは限りないという最後の二句には、痛切な離別の悲哀が溢れている。この二句の前句が「贈別竟無^二言」(駱賓王「送吳七遊蜀」)によると「小島注」は指摘するが、後句も「繁^二憂起^三万端」(駱賓王「同崔駙馬晚初登樓思京」)や「離^二憂積^三万端」(同「寒夜独坐遊子多懷簡知己」)に基づいていよう。

述べてきたように、養老七年時の饗宴で詠まれた作品は、①中華思想、②参加者全体の風雅性の強調(長屋王贊美の消滅)、③離愁、の三つを特徴とする。これは、叙述の中心を長屋王とその邸宅の風雅性に置く養老三三年時の饗宴での作品とはまったく異なっている。このような相違はどこから来ているのであろうか。結論を先に述べれば、養老三年時の長屋王を中心とする私的な饗宴に対して、養老七年時の饗宴は、公的性格を有していたことに起因すると思われる。

まず、特徴①については、この饗宴が、国家的賓礼としての拝朝の儀と、その後に行われる外国使慰勞の賜宴の延

長線上に位置づけられていたことによると考える。

拝朝の儀及び外国使慰勞の賜宴について、田島公氏の説くところを要約すれば次のようになる。拝朝の儀は、天皇が出御して、外国使の奏上する国書を受け取る儀式、また、外国使慰勞の賜宴は日本側の外交方針が伝えられる場であり、共に律令国家の外交権が皇権のもとにあることを意味する。律令整備以前の日本の外交権は必ずしも天皇に集中しておらず、天皇が外国使の前に姿を現すことはなかった。しかし、律令国家の完成に伴って、中国式の外交儀礼が求められ、外交権を持つ皇帝が藩国使に直接会見する中国の賓礼が取り入れられ、拝朝の儀等が整備された。また、日本は、律令国家の建設に伴って、対外的に自らを東アジアの小帝国になぞらえ、中華思想的な国際意識を持つようになつていたが、外国使を引見する拝朝の儀等は、天皇が小帝国の皇帝として諸藩国に君臨する場としても機能した¹³⁾。

田島説は右のように要約されると思うが、臣下による外国使への饗宴は、天皇主宰の拝朝の儀などの後に行われたのであろう。その逆は常識的でありえない。そして、養老七年時の饗宴は、長屋王の私宴の色彩の濃かった養老三年時とは異なり、この儀礼の延長線上に催された公的性格の強い行事だったのでないか。

長屋王宅での新羅使慰勞の饗宴の開催記事は正史に載っていないが、天平宝字三年正月に大保惠美押勝が田村の私邸で開いた渤海使慰勞の饗宴、同七年二月に大師押勝が開いた渤海使慰勞の饗宴、宝龜十年五月に右大臣大中臣清麻呂が私邸で開いた唐使慰勞の饗宴の記事が、『続日本紀』に載っている。いずれも時の首班が私邸で外国使をもてなした例で、長屋王邸での饗宴に範を取って催されたと考えられる。ところで、これら三つの饗宴は、拝朝の儀・外国使慰勞の賜宴に続くかたちで開かれ、また、そこでは天皇からの賜祿も行われているので、公的性格を持った宴だつたと思われる。こうした後代の例から見ても、養老七年時の長屋王私邸での饗宴が、公的な催しとなつていた可能性は高い。特徴①の中華思想の表明という内容が作品に表れたのも、養老七年時の饗宴が、皇帝として藩国に君臨した拝朝の儀などの延長線上にあつたからであらう。

また、特徴②が表れたのも、右のことと関係があると思う。宴の公的性格が強まれば、たとい自宅を饗宴の場として提供した長屋王であっても、彼一人が宴の主人とはなり得まい。私宴の性格の強かつた養老三年時の饗宴と違って、公的性格を持った養老七年時の饗宴では、宴における王の重みが薄らいでいたに違いない。その点は、養老七年時の饗宴参加者を見ればよくわかる。

背名行文

学業の師範として賞賜を受ける。時に明
経第二博士（養老五） 大学助（不明）

刀利宣令

侍東官（養老五）

下毛虫麻呂

学業の師範として賞賜を受ける。時に文
章博士（養老五） 式部員外少輔（同年）

大学助教（不明）

長屋王

右大臣（養老五）

安倍広庭

参議（養老六）

百済和麻呂

但馬守（不明）

吉田宜

学業の師範として賞賜を受ける（養老五）

藤原総前

参議（養老元）

下段は当時の官職等で、（ ）内は任官の年である。参加者に当代一流の学者が含まれているのは、漢詩文に長けた人物として当然であろう。養老三年時の饗宴の参加者である山田三方・調古麻呂も、養老五年に学業の師範として賞賜を受けている。しかし、両饗宴の最大の相違は、養老七年時の饗宴には、養老三年時には見られなかった参議が参加しているということである。いくら皇統の血筋を引く長屋王といえども、自己の開いた私宴に参議を呼びつけるようなことはできなかったのではないか。実際、『懐風藻』には長屋王が開いた私宴で詠まれた詩が残っているが、その参加者に当時議政官であった者はいない。養老七年時の

饗宴は、長屋王私邸で催されたとは言え、長屋王個人による私宴ではなく、広庭や総前を含めた議政官による共同主催の公的な行事であったと思われる。このような性格の宴においては、長屋王賛美の叙述が消える特徴②が表れるのも当然であろう。

そして、最後の特徴③も、饗宴の性格が、長屋王中心の私的なものから、議政官の共同主催による公的なものへと変化したことと関わっていると思う。なぜなら、長屋王の私宴の性格の強いところでは、参加者も長屋王に気を使う必要があるが、饗宴が共同主催となればその必要も薄まり、逆に、当の饗宴の目的——送別——がはっきりして来るからである。参加者に、当の宴が送別のための宴であるとの認識が強まれば、離別の詩情が作詩の主題として浮上して来るのは当然であろう。そのため、王駱集中の離愁表現が目ざされ、いくつかの詩に、旅人の心を慰めたり、別れを悲しんだりする表現が出てきたのではなからうか。このことを王駱集の享受史的観点から言えば、宴の風雅性にのみ着目する表面的な理解の段階を脱し、多数の送別詩を載せて悲しみに溢れている両集の心をくみ取るに至るまで、その理解を進めたのである。

四、まとめ

長屋王宅での新羅使を饗する宴は、養老三年閏七月と養老七年八月の二度に渡って行われたようだ。外国使慰勞のために賜宴が開かれることは、文武朝の頃から行われているが、臣下の私邸で外国使を供応する宴を開くのは、これが初めての試みであった。おそらく、最初の饗宴は、あくまでも試験的に行われるに過ぎなかったと想像される。そのため、上流貴族の開く私宴に近い性格のものとなつてしまつたのだろう。ただそこでは、当時伝来した最も新しい詩文集であつた王勃・駱賓王集の利用が行われ、詩序が作られるなど、文学史的に重要な出来事が起こつていた。しかし、宴の私的性格や、王略の新しい表現に対する理解が不十分であつたらしく、主催者や宴の風雅性を飾る程度の利用しかできていなかつた。

ところが、その四年後の饗宴は、拜朝の儀や外国使慰勞の賜宴といった朝廷の儀式の後に続く行事として、議政官の共同主催による公的行事に格上げされたらしい。天皇が藩国使と直接会見するこれらの朝廷の儀式は、天皇が諸藩国に君臨する小帝国の皇帝であることを確認する場でもあつた。その延長線上に催された饗宴で詠まれた作品であつたので、新羅使を朝貢使と見なす差別的表現がなされたの

も致し方ない。しかし、その一方で、宴の公的化に伴つて、以前の饗宴が抱えていた私宴的要素が後退し、送別の宴であることの認識が強まつたと思われる。その結果、王略集の離愁表現が注目され、饗宴にふさわしく、離愁や慰餞の情が詠まれるようになったのだろう。ここに初めて、王勃や駱賓王に対する真の理解が始まつたと言えよう。

注

- (1) () 内の数字は日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(小島憲之著。以下〈小島注〉と略記する)の詩番号である。以下同じ。
- (2) 大山誠一『長屋王家木簡と奈良朝政治史』一四二頁。
- (3) 釈清潭『懷風藻新釈』及び〈小島注〉。
- (4) 大野保『懷風藻の研究』、林古溪『懷風藻新注』(それぞれ〈大野注〉、〈林注〉と略記する)。
- (5) 大津皇子「春苑言宴」を侍宴詩ではなく皇子主催の宴と見ることにしては、拙稿「大津皇子の詩——その文学史的的位置——」(『和漢比較文学』十三) 参看。
- (6) 〈小島注〉及び小島『上代日本文学与中国文学 下』二二八五頁以下。
- (7) 注6に同じ。
- (8) 〈林注〉に「秋の喜ぶべく、また悲しむべきを総論し、送別の悲哀をひびかせる」とある。

- (9) 胡志昂「旅人・房前の倭琴贈答歌文と詠琴詩賦」(『上代文学』七十一)。
- (10) 注6前掲書二二九四頁。
- (11) 田村謙治「懷風藻の詩と六朝詩との關係——出典を中心として——」(『国語と国文学』一九五〇・九)。
- (12) 松浦友久「猿声」考」(『詩語の諸相——唐詩ノト——』)。
- (13) 田島公「外交と儀礼」(『日本の古代7 まつりごとの展開』)。
- (14) 長屋王邸宅で催された私宴の参加者及び官位官職は次の通り。従四位上治部卿境部王、従五位下備前守(目録は讚岐守外従五位下) 田中淨足、正六位上但馬守百済和麻呂、外従五位下大学頭箭集虫麻呂、従五位下陰陽頭兼皇后宮亮(目録は陰陽頭正五位上) 大津首、正三位式部卿藤原宇合、外従五位下大学頭塩屋古麻呂。境部王は高位高官であるが、彼とは同じ天武天皇皇孫のよしみで個人的につき合いが深かったのであろう。また、宇合の参議就任は天平三年、すなわち長屋王没後のことである。

「上代文学」投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆったりと組み、表紙に四百字詰め換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。